

# 『たましひの薄衣』 秀歌抄出三十首

\* 選考委員による抄出

「輪郭のないものばかりうつくしい」水辺に春のひかりながれて

スカートの裾ゆつたりと捌きつつ春のねむたき坂くだりゆく

電車にて隣り合ひたるおほき背を父とも思ひしばし凭るる

来るべき恋人  
L'amante à venirのためアダムより取られし肋をわれも秘めもつ

をさな子に鶴の折り方示しをり あはれ飛べざるものばかり生む

くちづけで子は生まれねば実をこぼすやうに切なき音立つるなり

ゆき先のなき旅として朝までをきみと白川夜船に乗りぬ

顔洗ふときにもみづは重たきにいかなる岸を彼岸とはいふ

初夏なれど絵のため部屋は冷やされぬシヨールをかけてしづかに巡る

子をいだくやうに辞典を抱へ持ち滑稽の思ひきざし来るかも

掬ふときなにかを掬ひのこすこと　〈ひかり〉と呼ぶと死ぬるほうたる

一生は長き風葬　ゆふかけ夕光を曳きてあかるき樹下帰りきぬ

けだるさは沼、晩禱の鐘が鳴りそこにかすかな波紋をつくる

わが生にあづかりしことなき快樂けらく　泥酔の人といふもの見たり

死ぬるほどの恋と思ひて死なざりき水ほそく出しグラスを洗ふ

語源なる苦passioの泉より情passionの潮念吹きだすまでをたどりつうしほ

春寒の岸に思ほゆヴァージニア・ウルフのほそくながき顔かんぼせ

渡されしカメラもきみのまなざしの容れものでありそつと抱きとる

培養基の世話にと夜を出かけゆく　ちひさきものと逢瀬あるべく

『ハドリアヌス帝の回想』読むたびに心に霧のごとき雨降る

新刊の棚に積まれてハイデガー講義録ほの青く翳れり

いたつき  
病のやうには消えぬ恋ならむ蠟は燃えつつ澄みゆくものを

青年と男を分かつ切り岸に源氏妖なり青海波舞ひて

マフラーが隠すあなたの表情を星座のやうに推しはかりぬき

メンデルの狂気慎みふかくして夕風さやぐ裏庭へ出づ

キリストを石もて追ひし人々の顔を思へりその微笑みを

本棚に背を撫でやれば『マキャヴェリの孤独』かすかに息づくことし

モン・マリ  
「わたしの夫」と呼ぶときはつか胸に満つる木々みな芽ぐむ森のしづけさ

レースよりあらはに透けてクラナーハのヴィーナスの腰くびれてをりぬ

背骨淨くまでに疲れて書きし論読みかへしつつ心むなしも